

1 多様なアプローチ（きっかけづくり）による里地里山の再評価と協働による取組の進展

④地域の伝統文化の継承と里地里山保全再生を結びつけた例

京都：笹葺き民家の再生等を通じた里山管理

宮津地区には笹葺き民家の集落景観がみられる。一般的なカヤ（ススキ、チガヤ等）と異なり、チマキザサを屋根材とするのは日本海沿岸地方の一部にみられた建築様式であったが、現在では残存数が少なく大変貴重なものとなっている。しかし、残存する笹葺き民家も居住者の高齢化や空家の増加などにより屋根の葺き替えが行われず老朽化が進んでいる。これに対し、NPO や大学、専門家等が参加する「笹葺き民家再生活用コンソーシアム」が設立され、笹葺き民家再生プロジェクトが進められている。

屋根の葺き替えのために必要なチマキザサは地域住民の指導のもと、かつてのカヤ場で刈り取られ、結果として、長く放置されてきた里山の再生につながっている。モニタリング調査でもササの刈り取りによって植生の多様性が増したことが確認されている。

また、宮津地区にはフジの繊維からつくられる古代布「藤織り」の技術が伝承されており、保存会によってフジの採取から機織までの技術を継承する活動が続けられている。

この他、NPO を中心に狩猟や薪づくりなど地域に伝わる生活文化の体験を通じてかつての持続的な里山利用について学ぶ活動が行われている。



笹葺き民家再生活用コンソーシアムによる屋根修復作業



伝統的な藤織技術を継承するための講習会の開催